様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18520136
研究課題名（和文）水戸藩と柳河藩を中心とした近世前期における知識人の交流と出版文化の研究
研究課題名（英文） A Study on Men of Letters´ Exchanges and Publication Culture in the Mito clan and the Yanagawa clan.

研究代表者
倉員　正江（長谷川　正江）（KURAKAZU MASAE/HASEGAWA MASAE）
日本大学・生物資源科学部・教授
研究者番号：70307817

研究成果の概要（和文）:水戸藩の彰考館や柳河藩関係者らが関与して編纂・刊行された『救民妙薬』『九州記』『参考源平盛衰記』等参考本の諸書をめぐって、企画から刊行に至る経緯を出版書肆と藩儒らの情報交換の様相を踏まえつつ、京都大学文学部所蔵『大日本史編纂記録（往復書案）』等の資料に依拠して具体的に考察した。さらに『九州記』が絶版処分を受けた経緯や『本朝武家高名記』をめぐる作者と柳河藩の確執から、軍書の刊行と出版規制につき考察した。

研究成果の概要（英文）：Through some books made and published by men of letters in the Mito clan and the Yanagawa clan such as the " *Miracle Life-saving Drug*" "*Kyushuki*" "*Honchobukekoumyouki*" and unpublished "*A Revision of Genpeijosuiki*" , an aspect that regulation about publishing in the early Edo period was strengthened by the Tokugawa shogunate became very clear using the "*Records of editing Dainihonshi*" in Kyoto University College of Literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	300,000	90,000	390,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総　計	1,400,000	270,000	1,670,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目:文学・日本文学
キーワード：近世文学・出版文化・水戸藩・柳河藩

1．研究開始当初の背景

(1)平成 13～平成 16 年度科学研究費補助金による「水戸藩編『大日本史編纂記録（往復書案）』に見る知識人の交流と出版文化の研究」（課題番号:13610518）を継承・発展させたものである。その時は全 249 冊の複写物を作成した『大日本史編纂記録（原題「往復書案」）』（京都大学文学部）を主たる資料とし、中国明朝の遺臣朱舜水の著述を集成した『舜水先生文集』二十八巻目録一巻付録一巻（元禄十年〈1697〉序・正徳二年〈1712〉跋・同五年京都茨城多左衛門刊／以下『文集』と略

す）編纂・出版に端を発した水戸藩と柳河藩の人的交流を探求した。『大日本史編纂記録』（以下『記録』と略す）は従来ほぼ『大日本史』の研究に限定された利用がなされていたが、それ以外の彰考館編纂物についての記録も詳細である。前回はまず『記録』の読解に時間をとられたため、『文集』とその編纂過程の余滴とも言うべき宝永五年（1708）茨城多左衛門刊『舜水朱氏談綺』三巻四冊にしか触れ得なかった。

(2)今回は前回の科研費による研究期間に全冊に目を通した際のメモから、『記録』の概要がかなりの程度まで把握できていたため、研究成果を発表するペースがあがることは見込まれた。特に前回の研究から新たに浮上した水戸藩と柳河藩の親密な関係については、学界でも相応の評価を得たと自負している。そこで今回はここに特化して、考察を深めたいとの見通しを抱いた。

２．研究の目的

(1)近世前期における水戸藩彰考館員と柳河藩儒安東家関係者を中心として、編纂事業をめぐる藩儒らと書肆・著者による情報交換・情報伝達のネットワーク形成の具体的諸相を明らかにする。

(2)近世後期の場合と異なり、近世前期の出版関係の資料、また文人間、特に遠隔地間の交流に関する研究は従来極めて乏しいと言える。その研究の欠落期を『記録』や「安東家史料」等を利用することで新たに照射することを目的とした。

３．研究の方法

(1) 出版物ごとに『大日本史編纂記録』中の当該箇所の読解・翻刻を取捨選択して進める作業が中心となる。閉じの深い箇所は京都大学古文書室にて原物に当たっている。「茨城県史料」中に活字翻刻がある箇所はそれを利用した。茨城県立歴史館所蔵 31 冊分の「往復書案」は前半部分が前掲書に翻刻されているが、紙背に記された箇所は非常に判読しづらく、翻刻が中絶したまま残されているのが現状である。これは写真やフィルムでは意味を持たず、原物に当たって必要部分のみを翻刻した。

(2) 次に諸本調査が必要になる。『救民妙薬』『九州記』『九州諸将軍記』『戸次軍談』『日本人物史』『本朝武家高名記』『立花戦功録』『参考源平盛衰記』等参考本の複写物入手と軍記を中心に諸本の閲覧調査を進めた。貝原益軒著「和漢名数」等数種の名数書の諸本も調査し、海賊版らしき版も判明した。

(3) 地域としては九州地方の図書館を中心に訪書した。柳川古文書館の「安東家史料」は、最も頻繁に利用させていただいた。原蔵者御花史料館の立花宗茂宛豊臣秀吉感状を拙稿に掲載することができた。それ以外にも、国文学研究資料館編「日本古典籍総合目録データベース」に未掲載の史料も少なくなく、閲覧・翻刻作業を進めた。他に福岡県立図書館・久留米市立図書館・北九州市中央図書館・佐賀県立図書館・九州大学附属図書館・大分県立図書館・熊本県立図書館等が上げられる。

(4) 熊本県立図書館蔵「泰勝寺縁起（仮称）」は『九州記』の校訂者性天禅旭の伝記を追求する過程で発見した未紹介資料である。幸い図書館のご厚意で地元の業者からカラー写真を入手することができ、翻刻掲載を許可された。

(5)『九州記』の著者春龍が当時住職を務めた旧柳河藩領瀬高にある二尊寺の現ご住職池上彗門師には、性天和尚の位牌が保管されているなど、貴重な情報と史料の複写物を提供していただいた。また徒歩では行きにくいような八院合戦（柳川合戦）古戦場阯を車で案内していただき、『九州記』を理解する上で大変参考になった。

(6)『記録』が京都大学に寄贈された経緯について、伊勢松坂の豪商小津清左衛門家（本家）の調査を行った。

４．研究成果

今回は８本の論文を発表した。以下発表順に成果としうる点を記す。

（1）前回取得した科研費に拠って考察した『舜水先生文集』編纂・出版過程においては、多くの周辺事情が判明した。以下簡略に纏めて記す。

①関係した明朝遺臣の中国人や仲介役の唐通事と水戸藩との関係。
②舜水の文集を徳川光國が当初中国で刊行すべく計画したが挫折した事情。
③茨城多左衛門による『文集』版下作成指示とその体裁。
④『文集』を実際に購入した人々。寺院関係者が購入している点。
⑤長崎在住唐通事高尾家と水戸安積家交流の具体的様相。従来唐通事は単なる通訳業者といった位置付けをさして出ることがなかったが、鎖国下における中国事情の伝達・日中文化交流に果たした役割がクロー

ズアップされたこと。

(2) 庶民向けの啓蒙的な薬学書『救民妙薬』(元禄六年〈1693〉序・同八年刊) 一冊は、光圀の侍医穂積甫庵こと鈴木宗与の編纂になる。光圀の仁政の一環として小冊子ながら高く評価されている。今回判明したことを以下に纏める。
①本書が『妙薬単方』の改題増補版であること、諸本の関係、京都の茨城多左衛門ではなく、当初江戸の富野松雲なる書肆が蔵版していたこと。
②従来松雲の方が、茨城刊行書の江戸売捌元と漠然と考えられていたが、そうとは限らないケースがあること。後に松雲が廃業し、茨城が松雲蔵版本を全て求版【文字通り「版木」を買い取る】したこと。
③本書は「重宝記」類との重版トラブルが頻発しており、江戸においても出版規制の必要性を誘発したと思しいこと。
④茨城と村上勘兵衛とが彰考館編纂書刊行をめぐって確執を起こしたこと。

(3) 明和八年〈1771〉刊『禁書目録』掲載軍書『九州記』が絶版に至る事情と、クレームを出した柳河藩の動向を明示した。本件については従来全く言及がなかった。
①安東家史料に残る二つの「英山様え言上之写」や関連書簡断簡から、柳河藩が京都所司代に絶版を願い出ようと企図しながら、正式な裁判は断念したこと。
②京都の版元田中庄兵衛自ら絶版を申し出たため、穏便に済ます方策が求められたこと。
③以前に絶版となった三書として、後水尾院が関係した歌書・『石田軍記』・『日本古今人物史』が挙がること。なお『日本人物史』は絶版になったが覆刻されて流布、諸本については、別途研究会にて口頭発表を行った。→〔学会発表〕
④『九州記』のどこが問題視されたのか推測の域を出ないが、「肥前」「鍋島」の名が挙がるため、柳川合戦(地元では「八院合戦」)の記述の不公平さと考えられること。
⑤『九州記』絶版の代替作『戸次軍談』が刊行され『九州諸将軍記』と改題されたが、幕末まで両書とも刊行された事実があること。
⑥軍書出版をめぐるトラブルが、享保七年の「出版条目」に「子孫より訴出」の文言を付加させたと推測されること。

(4) 樋口好運著『本朝武家高名記』(以下『高名記』と略す)のいわゆる「武家名数」と『書言字考節用集』当該箇所の比較から、後者が前者を参照したと考えるのが自然であると結論した。
①曲亭馬琴が『高名記』を実見していた明証が『燕石雑志』に見られること。
②「武家名数」に関連し、貝原益軒著「和漢名数」以来名数書が多数刊行され、名数ブームを巻き起こしたこと。
③『高名記』中の記事から好運の出自が知れること。典型的な関ヶ原浪人で、流浪の末小児科医となったこと。
④近世前期の軍書作者の傾向として、浪人者が多少の捏造を含め、各家の系図作成を担っていたケースがあること。

(5)『九州記』の校訂者性天禅旭が細川藩菩提寺泰勝寺の住職として元禄十一年に妙心寺に歴住した際、地下歌人平間長雅が認めた「泰勝寺縁起(仮称/以下「縁起」と略す)」を紹介した。判明したことは
①性天が第二代細川藩主光尚の愛顧で幼少期より妙心寺で修行したこと。
②龍谷大学蔵「性天和尚妙心入寺儀注」を参照すると、「縁起」と相補う箇所が多いこと。
③歴住当日の八月二十日に性天が東山天皇に謁見していること。
④「縁起」に長雅の和歌史観が表出されるが、松永貞徳『戴恩記』の影響が見られること。
⑤性天と長雅の和歌を介した交流が知られること。その人脈で、肥後藩にも和歌を嗜む藩士が増えていたと見られること。
⑥性天が八代城主松井直之と親交があったこと。

(6)『高名記』「感状巻」には豊臣秀吉が立花宗茂に宛てた感状計十八通が収録される。好運の柳河藩への特別な興味関心が窺われるが、この感状の掲載をめぐって安東家関係者と好運の間に確執が生じた。また安東省菴が感状を史料として『立花戦功録』(柳川古文書館に写本で二種存/以下『戦功録』と略す)を編纂し出版を意図して増補した点を考証した。
①宗茂宛の感状を集成した写本は複数かつ多数流布しており、この人物への関心の高さを窺わせるが、誤謬も少なからず見られ信憑性に疑問視する必要があること。
②『高名記』編集に際して、当初安東家ら柳川藩側から納得の上で好運に資料提供をしていたが、編集の杜撰さから藩側の不満が惹起されたこと。
③省菴は朝鮮出兵時の宗茂の活躍に幼少期から憧れていたらしく、その功績を顕彰するため『戦功録』を執筆したこと。
④省菴が『太閤記』中の宗茂の逸話が不十分であると感じ、自作の出版を企図したが果たせなかったこと。

(7) 彰考館で編纂された参考本のうち唯一未刊で流布した『参考源平盛衰記』の編纂から幕府献上と刊行断念に至る事情を解明した。『記録』中の「盛衰記刪定記事」(以下「記

事」と略す）一冊の部分を翻刻掲載した。
※現在京都大学古文書室と東京大学史料編纂所の提携の下『記録』のデータベース型目録を作成中とのことである。この仕事を担当する助教鍛治宏介が「「大日本史編纂記録」の史料的特質の検討」の中で拙稿に触れている。私の研究がこの貴重な史料のデータベース化を促す一因となったことは望外の成果であると付記する。
①「盛衰記刪定記事」は『記録』の記事の再録であるが、原書案が失われたものが多く貴重であること。
②「記事」は年代順の収録ではなく年次推定が困難なケースも多いが、『記録』中の記事と対比することで解決する部分も少なからずあること。
③内藤甚平が今井弘済没後の元禄四年に校訂作業を引き受け、数名の補助者はいたが一貫して甚平が責任者であったこと。元禄十五年閏八月三日に甚平が死去、この時までに参考本の献上と褒章があったこと。
④参考本の版行計画が持ち上がるが、体裁をめぐって改定案が出され、一松又之進が任に当たったこと。
⑤又之進の作業が想定外の遅延をもたらしたため、その能力に疑問が出され、栗山平蔵（潜鋒弟）がその任を代わったこと。
⑥水戸藩の財政難から参考本刊行に下賜金を望めず、入銀を募った茨城の単独版行を目指したが、結局刊行に至らなかったこと。
⑦写本のまま享保十六年（1731）九月二十九日に将軍吉宗に献上したこと。
⑧献上後に刊行計画が再燃したが、経済面のほか版下清書にも人材を得られず、断念されたこと。
⑨参考本の底本は内藤義英（俳号露沾）から拝借して書写した本の可能性があること。

（8）近世前期における「版権」意識の確立を、従来の私の研究を集大成して彰考館編纂書を事例に考察した。
彰考館と書肆の関係では茨城多左衛門が一般に知られるが、初期には富野松雲や村上勘兵衛が彰考館出入りをめぐって確執を起こしている実態がある。
当時の刻版技術に照らしても、本の制作は京都で行われたと見るのは自然である。松雲と茨城の関係については、水戸藩側は松雲が版元であるとの認識を示していたしていたが、実際の版木の保管場所は製作側である茨城であったため、双方の認識の齟齬が生じている。こうしたことが書肆による蔵版目録の作成や、ひいては版権意識の確立を招いたと推測される。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
①倉員正江, 彰考館編纂書の出版をめぐる諸問題―茨城多左衛門と富野松雲等出版書肆の関係を中心に―, 『江戸文学』41, 20-32, 2010, 査読無
②倉員正江, 『参考源平盛衰記』編纂事情―付・翻刻『大日本史編纂記録』第二四五冊「盛衰記刪定記事」―, 『人間科学研究』7, 279-302, 2010, 査読有
③倉員正江, 『本朝武家高名記』「感状巻」と安東省菴著『立花戦功録』―軍書出版と柳河藩の情報公開をめぐって―, 『江戸文学』41, 47-60, 2009, 査読無
④倉員正江, 性天禅旭と平間長雅・八代城主松井家との関係覚書―熊本県立図書館蔵「泰勝寺縁起」の考察を中心に―, 『人間科学研究』6, 184-198, 2009, 査読有
⑤倉員正江, 『書言字考節用集』巻十「数量門」と『本朝武家高名記』覚書―「里見八犬之士」「尼子家十勇十介」等武家名数を中心に―, 『近世文芸研究と評論』74, 34-50, 2008, 査読無
⑥倉員正江, 軍書『九州記』絶版事情と江戸の出版規制―柳川古文書館所蔵安東家史料を中心に―, 『人間科学研究』5, 380-402, 2008, 査読有
⑦倉員正江, 『救民妙薬』をめぐる諸問題―彰考館と書肆の関係から重板問題に及ぶ―, 『人間科学研究』4, 228-244, 2007, 査読有
⑧倉員正江, 『舜水先生文集』編纂とその周辺―『大日本史編纂記録』に見える中国人・唐通事のことなど―, 『近世文芸研究と評論』71, 28-42, 2006, 査読無

〔学会発表〕（1件）
①倉員正江, 絶版書『日本人物史』の諸本をめぐって, 近世文芸研究と評論の会, 2007. 10. 27, 早稲田大学文学部

6．研究組織
(1) 研究代表者
倉員　正江（長谷川　正江）（KURAKAZU MASAE/HASEGAWA MASAE）
日本大学・生物資源科学部・教授
研究者番号：70307817

(2) 研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3) 連携研究者
（　　）
研究者番号：